



I—太陽と月 (京都に於る値)

日附	日出	日没	(星座)	日附	月齡 (正午)	日出	月没	(星座)
日	時分	時分		日	日	時分	時分	
1	4:44	19:5	(う し)	1	21.4	23:47	10:43	(みづがめ)
6	4:43	19:8	”	2	22.4	—	11:45	”
11	4:42	19:11	”	3	23.4	0:19	12:38	(う を)
16	4:42	19:13	”	4	24.4	0:52	13:54	”
21	4:43	19:14	”	5	25.4	1:28	15:01	”
26	4:44	19:15	(ふ た ご)	6	26.4	2:07	16:12	(ひ つ じ)
翌1	4:46	19:15	”	7	27.4	2:53	17:24	”
				8	28.4	3:47	18:33	(う し)
				9	0.1	4:47	19:37	”
				10	1.1	5:53	20:33	(ふ た ご)
				11	2.1	7:03	21:20	”
				12	3.1	8:11	22:01	(か に)
				13	4.1	9:17	22:38	”
				14	5.1	10:21	23:10	(六 分 儀)
				15	6.1	11:21	23:40	(し と め)
				16	7.1	12:19	—	(を と め)
				17	8.1	13:16	0:10	”
				18	9.1	14:13	0:40	”
				19	10.1	15:09	1:12	”
				20	11.1	16:04	1:46	(て ん び ん)
				21	12.1	16:59	2:25	”
				22	13.1	17:51	3:07	(蛇 遣 ひ)
				23	14.1	18:39	3:55	”
				24	15.1	19:24	4:47	(い て)
				25	16.1	20:06	5:42	”
				26	17.1	20:43	6:39	”
				27	18.1	21:18	7:38	(み づ が め)
				28	19.1	21:50	8:37	”
				29	20.1	22:21	9:38	”
				30	21.1	22:54	10:40	(う を)

II—天象

日	時	天象
6,	7	金(南6°)と月と合
6,	22	天(南3°)と月と合
7,	8	水星極大離角(西24°)
7,	18	海王星が西矩
8,		皆既日食
18,	20	金(南3°)と天と合
20,	19	火(北4°)と月と合
22,	5	夏至
22,	8	金星が遠日點
26,	10	木(南4°)と月と合
27,	6	土星が東矩
27,	11	金星極大離角(西46°)
28,	6	火星が停留
29,	12	水星が昇交點

下弦 2日, 14時 : 24分  
 上弦 16日, 4時 : 3分  
 近日點通過 8日, 12時

新月 9日, 5時 : 43分  
 満月 24日, 8時 : 0分  
 遠地点通過 21日, 5時

主な流星群

日附	赤緯	赤緯	附近の星	性質
6月下旬	24°	+43°	アンドロメダ $\alpha$	速, 痕
月末	213°	+53°	大熊座 $\eta$	緩

## 遊 星 界 (6月)

**水星** 先月太陽面をタツチした水星は、この月は太陽の西側に現れて、早曉の東天に零等級の輝きをみせる。7日極大離角(西24°)となつて上旬が見頃である。星座はうし座。

**金星** 夜明け前の東天に「曉の明星」<sup>7</sup>として-4等前後の光芒を放つ。羊座に順行中で、望遠鏡裡に鋭く缺けた鎌型が見られる。まだ明けやらぬ東天の金星は慈悲の光明、航海者には十字架と仰がれるであらう。27日極大離角(西46°)となる。

**火星** 最接近間もない火星はこの月は愈々觀望の絶好機で、アンタレスに先驅けして東天に昇る。天秤座を逆行中で、宵空に南中する。20日に月齡11日の月が火星の南4'の處をキワドク會合するのは、紅い火星と白い月の愛嬌ある共演だ。28日停留し、追々遠ざかる。光度-1.5等。

**木星** 射手座を逆行中の木星は、火星に後れること約4時間にして深夜の東天に昇り、早曉に南中する。光度は-2.2等、夢みるやうな表面の縞模様が見もの。

**土星** 木星に次いで、約5時間後に曉の東天に昇り、うを座に1.4等級の光りを放つてゐる。追々太陽より西へ離れて、27日西短となる。月末程長く觀望出来る。

**天王星** 羊座の中程6.2等の星である。

**海王星** 獅子座の後脚の處に運行してゐる。光度7.8等。

**冥王星** この遊星の戸籍はまだ十分調査し切れない縁遠い星だ!

—☆ ↗ ↘ ★ ★ ↗ ↘ ☆—

**星座** やがて梅雨晴れの空に仰ぐ「乙女」<sup>7</sup>、「牡牛」<sup>7</sup>の星座は、前者の青白いスピカ、後者の赤いアルクチュラスの一等星によつて、ソレと見出し易く親しまれ、「獅子」<sup>7</sup>、「海蛇」<sup>7</sup>等の晩春の星座を西へ見送つて、やがて、東天に「ヘルクレス」<sup>7</sup>、「蛇遣ひ」<sup>7</sup>、「蛇」<sup>7</sup>の神話の主が登場する時、南天近く、火星の君臨する「天秤」<sup>7</sup>が南中し、「蠍」<sup>7</sup>これを追ふ。アンタレスが赤い。(時の星)